EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

えど友

EDO-TOMO

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

No.32
2006
（平成 18 年）
7－8

江戸東京博物館友の会会報

目次

平成 18 年度定期総会開催 / 会員数の推移 …… 1
平成 17 年度事業報告 …… 2
平成 18 年度事業計画 / ご意見・ご要望へのお答え …… 3
小澤教授記念講演要約『**百景―江戸と上方と美人**』…… 4
友の会セミナー『**古文書が語る白木屋の商いと暮らし**』… 5
特別観覧会『**ナポレオンとヴェルサイユ展**』…… 6
江戸博クリップ『**ひとりごと**』…… 6
見学会『**銀座（東銀座側）と築地方面の探訪**』…… 7
会議・会合日誌 …… 7
えど友プラザ　特集「私の昭和・東京」その1
『**戦争、空襲そして終戦**』/『**震災復興途中の昭和初期**』/『**水泳**』… 8
えど友サークルだより …… 9
江戸博界隈⑩ [**花火資料館**] と [**イタリア料理・アレグレッツァ**] …… 10
催事案内 …… 11
会員優待のお知らせ …… 12
平成 17 年度収支決算報告 …… 別冊 1
平成 18 年度事業予算 / 費目の一部改正について …… 別冊 2

平成 18 年度定期総会開催

さらに充実の 6 年目へ

江戸東京博物館友の会、平成 18 年度定期総会は、5 月 26 日（金）午後 1 時 30 分から江戸博 1F ホールにおいて開催されました。柏木静さんの司会で開会し、来賓の木村俊弘江戸博副館長と小林淳一同事業企画課長をご紹介したあと、岩松精友の会会長のあいさつに続いて、木村江戸博副館長のご祝辞をいただき、議事に入りました。議長には清水昌紘さん、副議長には山本隆さん、書記に藤井文乃さんと稲垣武志さんが選ばれました。議長より総会成立要件について、出席者 110 名、議決権行使書提出者 506 名、合計 616 名で規定数を満たしており、総会成立の旨報告がありました。上程された議案は 2 件です。

1）平成 17 年度事業報告並びに収支決算報告
2）平成 18 年度事業計画並びに事業予算案

数件の質疑応答がありましたが、各議案とも賛成多数で、提案どおり可決承認されました。その他の件として、芦沢陽雨山、安西洵、川辺愛子の 3 氏の役員退任とその補充はしないことについて、報告が行われました。

今年度の会の活動は、江戸博からの一層の協力とご支援のもとに、さらに充実したものにします。会員数も現在 1,000 名を突破し、会員の意見や要望にそった各種企画事業など、参加

率、満足度ともより高い内容をめざします。

総会は午後 2 時 30 分に終了し、休憩の後江戸博小澤弘教授による記念講演「百景―江戸と上方と美人」（要約は 4 ページ）がありました。さらに 5 時からは 2 階レストラン「モア」で懇親会が開かれ、会員相互に交歓のひとときを過ごしました。

会員数の推移

	平成 14 年 3 月末	平成 15 年 3 月末	平成 16 年 3 月末	平成 17 年 3 月末	平成 18 年 3 月末
新規会員数	826 人	298 人	304 人	225 人	291 人
継続会員数	0 人	574 人	658 人	766 人	778 人
合　計	826 人	872 人	962 人	991 人	1,069 人
対前年度伸び率	―	105.6%	110.3%	103.0%	107.9%

第１号議案　平成17年度事業報告ならびに収支決算報告

「催事への参加者減が反省点」

〔活動概況〕

平成17年度は「友の会」の活動５年目にあたり、前年度に引き続き会員数も順調に増加し、３月末で1069人と1000人の大台を突破いたしました。これはひとえに会員の皆様のご協力の賜物と感謝しております。特に本年は博物館から事務室の提供、セミナーへの講師派遣などのご支援をいただいております。また竹内館長には友の会５周年記念事業として特別講演を行っていただきました。

事業部会・広報部会・総務部会とも会員の皆様のご協力を得て事業計画にしたがい活動を展開してきましたが、これとは別に会員の自主活動である「えど友サークル」も、新たに「藩史研究会」「古文書で『八丈実記』を読む会」が発足し活動を続けております。

しかし残念ながら「友の会セミナー」「見学会」「特別内覧会」などへの平均参加者が減少しております。これは年初に掲げた基本方針に対して適切な対応が取れなかったことと大いに反省している次第です。このようなことを含めて昨年度の各種事業について、下記にご報告いたします。

なお、創立５周年記念事業として次の２つを行いました。

(1) 館長特別講演会の開催
平成18年３月23日江戸博１階ホール
講師 江戸東京博物館 竹内 誠 館長
演題「江戸幕政の展開と紀州閥の形成」
参加者数234名（一般を含む）

(2)「『えど友』に見る５年の歩み」の発行と配布。

１．事業部会

17年度の事業総括は次のとおりです。

事業名	開催回数	参加者数
友の会セミナー	９回	416人
古文書講座	27回	1,477人
見学会	６回	355人
特別内覧会	６回	417人
計	48回	2,635人

２．広報部会

(1) 会報『えど友』
計画どおり年６回発行しました。読みやすく親しみやすい会報を目指し、今年度より版下作成を外注化し、誌面のイメージを一新しました。投稿者数の増加は見られず、やや特定の人に限られた点は反省材料です。

(2) ホームページ「えど友Web」
１昨年11月再開以来20,000件を超えるアクセスがあり、ホームページとしての役割を果たしております。ただ、速報性の点ではまだまだ不十分な点がみられたため、次年度は改善を図ることを部会内で申し合わせました。

(3)「えど友PR版2005年」
「入会案内」の活用によりその意義が薄れたため、「2005年版」の作成は見合わせました。

３．総務部会

(1) 総会の運営
平成17年５月28日㈮実施の総会の準備および当日の運営を行いました。

(2) 友の会会報等の発送　８回

(3) 特別内覧会の受付　６回

(4) サークル活動　４サークル34回

監査報告書（謄本）

江戸東京博物館友の会規約第７条の３の５の規定に基づき、私たちは平成17年４月１日から平成18年３月31日までの平成17年度・友の会活動の執行を監査しました。その結果以下のとおり報告します。

1. 監査の方法の概要
私たち監事は、役員会その他重要な会議に出席するとともに、運営委員等からの活動の報告を聴取し、重要な決裁書類等を閲覧し、活動の運営ならびに収支に関する会計帳簿・証憑等の調査を行い、重要な決裁書類等の内容について検討しました。

2. 監査の結果
(1) 事業活動報告は、目的に従い、活動の状況を正しく示し、活動は計画どおり推進されたものと認めます。
1）友の会の活動５年目にあたり、17年度の会員数が1000名を超えたことは、友の会の活動が着実に実施されてきたことの証左であり、運営委員ならびに事業部会、広報部会、総務部会の各部会員の努力の結果と評価します。
また、江戸東京博物館からは、友の会の事務室の提供や館スタッフのセミナー等への協力があり、友の会の活動の充実が図られており、今後とも館と友の会の良好な関係の維持を期待します。
2）活動内容において、セミナー、見学会、古文書講座等が安定的に実施されていますが、全体として参加者数が若干減少しています。その原因を探り、より魅力ある活動を展開し、会員の参加増を目指すことを期待します。

(2) 収支等に関しては、会計伝票・帳簿類は、記載すべき事項を正しく記載し、収支決算書の記載と合致しているものと認めます。

(3) 収支決算書は会計原則に則り、収支の状況を正しく示しているものと認めます。

(4) 友の会役員の職務遂行に関する不正行為又は、法令もしくは友の会規約に違反する事実は認められません。

平成18年４月13日

江戸東京博物館友の会
監事　畠中 勇 ㊞
監事　井波良子 ㊞

第２号議案　平成18年度事業計画ならびに事業予算

セミナーのテーマ選定などに工夫

〔基本方針〕

昨年度は、報告のとおり反省点のある１年でしたが、平成18年度は友の会セミナーのテーマ選定などに工夫を加えるとともに、博物館のご協力も得ながら、一層充実した、効率的な運営に努めたいと考えています。

これらを実現するため、昨年度の結果と反省を踏まえ、本年度は下記の基本方針を掲げました。

1. 会員の意見要望を事業活動に反映させ、全員が満足できるよう活動の充実を図る。
2. 会員の継続増強を図る。
3. 計画事業へのより多くの会員参加を図る。
4. 会員相互のコミュニケーションの機会をつくる。

上記に基づく各部会の活動計画および予算は次のとおりです。

１．事業部会

(1) 友の会セミナー

昨年度の反省を踏まえ、セミナー参加者の増加を図るため、次の点に留意しました。

・魅力あるテーマの選定
・著名な講師の招聘
・極力前広な計画立案
・十分な予告
・適切な開催日・時間の選定
・博物館の支援（会場の確保・講師の協力）

全体的には、10回実施する予定ですが、変更する場合もあります。すでに具体的に計画されているものは次のとおりです（講師などは11ページを参照してください）。

・実施予定月「テーマ」
・４月（実施済）「古文書が語る白木屋の商いと暮らし」
・６月「江戸時代の旅事情と旅人たち」
・７月「鹿鳴館の女たち」
・８月「落語の起源と寄席のはじまり」
・９月「映像史の視点・映画に見る東京」
・10月「江戸の最高学府―昌平黌とそこに学んだ人々―」
・11月「江戸の狂歌ブームを探訪する」
・12月「江戸の町割長屋の人々の暮し向き」

(2) 古文書講座

古文書講座は昨年度と同様、下記のような計画を進行中です。定員は各回50～80名。

入門編	３期	９回
初級編(1)	３期	９回
初級編(2)	３期	９回

(3) 見学会

全体として6回実施予定ですが、すでに下記のように計画されております。

・実施予定日「テーマ」
・５月13日（実施済）「銀座（東銀座側）と築地方面の探訪」
・６月10日（実施済）「江戸四宿を歩く（内藤新宿・その1）」
・９月「神田・御茶ノ水周辺探訪」
・10月「世良田東照宮方面探訪・バス旅行」
・11月「江戸四宿を歩く（千住宿・その2）」
・19年３月「江戸城周辺探訪（その1）」

(4) 特別内覧会

全体として６回実施いたしますが、特別展初日の前日またはその前後に実施する予定です。

２．広報部会

(1) 会報「えど友」

従来どおり、隔月で年６回発行します。内容面に変化を持たせるため新しい企画を取り入れるとともに臨機応変の編集を行います。投稿欄（「えど友プラザ」）へ１人でも多くの会員に登場していただくよう努力します。

(2) ホームページ「えど友Web」

ホームページの細やかな更新に努めます。

ご意見・ご要望にお答えします

問　５月26日の「友の会定期総会」後の小澤弘教授の記念講演と、江戸博オムニバス講座（「江戸の草創名主」高山慶子講師）が時間的に重複したため、お二人のお話が聞けず残念、ダブルことのないよう配慮してほしい。

答　「友の会定期総会」の日程は会場予約の関係から、約半年前に決定しております。この時点で江戸博の行事が予定されていなくても、その後、新しい講座・行事が企画されると、今回のように重複することになります。

友の会と江戸博はご承知のとおり全く別の組織のため、行事日程のすりあわせにはおのずから限界のあることをご理解願います。

３．総務部会

(1) 総会の運営

５月26日（金）済

(2) 特別内覧会などの受付

年に６回開催される特別展等の内覧会の会員受付を事業部会とともに行います。

(3) 各種発送業務

会報については年６回、その他の発送については年に４回程度行います。

なお、この発送の日に合わせて総務部会を開催します。

(4) サークル活動

前年度に引き続き推進します。

［平成17年度収支決算報告］および**［平成18年度事業予算］**は別冊のとおりです。

報告事項　役員の退任について

今回都合により芦沢陽雨山、安西洵、川辺愛子の３氏が役員を退任することになりました。なお、本件にともない玉木達二氏が会計から事務局長に、谷岡文彦氏が運営委員から会計に、後藤幸子氏が運営委員から同・総務部会長に担当を変更いたします。これにより欠員役員の補充はいたしません。

江戸東京博物館友の会定期総会　記念講演要約（2006/5/26）

百景―江戸と上方と美人

江戸東京博物館　都市歴史研究室長
小澤　弘 教授

「百景」の百という数は、景色・シーンなどすべてというような意味を持っています。今から150年ほど前に作られた3つの百の作品をお見せしながらお話しましょう。江戸と上方と美人、それぞれの百景です。

上方の中心は千年の都・京都

江戸からみた上方の範囲は京都、奈良、大坂、伊丹、大輪田の泊（五泊のひとつ）などです。中でも千年の都、京都(平安京)は非常に長い歴史と伝統文化の日本の中心地として、江戸で幕府が開かれてからも宗教的な基盤、天皇家、朝廷があり、伝統的な技術工芸、観光化した寺院も存続していました。東・北・西を山に囲まれ、南部に広がりをみせた盆地で東に鴨川、西に大堰川が流れています。坊条制の区画整理された四神相応の王城都市でした。

新しい武都・江戸と見立平安京

徳川家康は天正18年(1590)江戸入府以来、約50年くらいかかって江戸の中核に城郭都市を形成しました。お城を中心に西側に高台の後背を用意し、東側の港を中心にして職人と商人の町を作りました。しかし、基本的な理念は京都の四神相応の坊条都市をまねたのです。江戸城からみて鬼門の位置に当たる方向に東叡山を持ってきて、琵琶湖に見立てて不忍池を造り、清水の観音堂、三十三間堂、愛宕の社を勧請しました。かなり方位性はくるってくるのですが、京都に見立てて武士の都が築かれたのです。

しかし、京都との違いは江戸が災害都市であったことです。もちろん京都にも大火はありましたが、江戸は10年に1度くらい半分から3分の1くらい焼ける火事があったのです。江戸の名所地も火災、風水害などの被害を受けながら大きな広がりを見せていったのです。隅田川の東側と西側に大きな有楽の地ができます。両国橋などの大橋が架かることによって都市部が拡大しました。

浮絵から見立絵への広がり

洛中洛外図や江戸屏風のような都市の景観図が描かれましたが、一方で、絵画は伝統文化と産業の町が観光都市として発達していった江戸中期に西洋から透視図法が入ってきて、浮絵となりました。遠近法を応用し、実景が浮き出して見えるように描かれた絵です。京都では円山応挙や横山華山が一望図を描き、江戸では鍬形蕙斎や鳥居清長が新しい風景を表わしました。こうした絵は十二景、二十四景、三十六景、五十景、百景の見立て絵として非常な広がりを見せていくことになります。

地震と江戸百景

安政初年に各地で地震が起こり、江戸では安政2年(1855)10月2日に大地震が起こりました。多くの死者をだし、町に大きな被害をもたらしました。

その直後、江戸・上方・もう1つ江戸で「百景」が作られました。江戸で歌川（安藤）広重の描いた「名所江戸百景」118枚と二代目広重の描いた1枚を加えた119枚が、安政の大地震の次の年から刊行されました。この絵は地震後の復興の風景を描いたものだといわれています。江戸下谷黒門町にあった板元魚屋栄吉が地震で働き場を失った彫師や摺師を集め新規格の百景を名所絵で評判の広重に頼んで出版したものです。安政3年から5年(1856～1858)にかけて、広重がコレラで亡くなるまで続けられました。これらの絵には竪フレームなど新しい手法が見られます。沢山の名所絵は江戸へ来た人の土産品として量産されました。さまざまな事件が起こっている時であり、新しいテーマを求めた広重の心境が伺われます。広重没後にまとまって出版されました。

はんなりとした上方の百景

上方の百景は、広重の百景が評判になったことに影響を受け、ほぼ2年後、大坂の石川屋和助という板元が5人の絵師（東居・北水・玉園・国員・春翠）に頼んで「都百景」を出版しました。これはきっちり100枚です。江戸にくらべるとはんなりとした上方らしい百景です。彫りや摺りに江戸にはない工夫が見られます。ちなみに「浪花百景」も続けて出されました。

美人+名所で「江戸名所百人美女」

同じ頃、江戸の板元が合板で美人画と名所絵を一緒にしたものを出版しました。美人画を主体に江戸名所をコマ絵（小さな縁付きの絵）にして1枚の絵として売り出したのです。これが「江戸名所百人美女」100図です。三代歌川豊国（初代国貞）が美人画を描き、娘婿の二代目国久がコマ絵を描いた共同作業でした。2年間で百枚描かれました。

これらの「百景」シリーズは、地震という災害を契機として出版界が上方や江戸で、ほぼ同時期に出版したものなのです。

【記録】　文：広報部会・岡橋園子
写真：同・岡田守弘

第39回 江戸東京博物館友の会セミナー（2006／4／22）

古文書が語る白木屋の商いと暮らし

―店定法から読む日本橋店の奉公人―

講師　油井宏子さん
（NHK学園古文書講師）

参加者全員で、ご一緒に実際の古文書を解読しながら、江戸時代の商家の奉公人たちの暮らしぶりの一端をさぐってみましょう。それとともに、その文書から見えてくる店の背景のお話も楽しんでください。という先日のセミナーに、大勢の方々が熱心に参加くださり、心からお礼申し上げます。

白木屋と『永録』

取上げた史料は「白木屋文書」（東京大学経済学部図書館文書室所蔵）の『永録』です。この帳面自体には年号が記されていませんが、ほぼ同様の内容を持つ他の文書から、寛政８年(1796)頃と推測されます。

『永録』は白木屋日本橋店の店定法のひとつです。奉公人達が守るべき規則が52か条にわたって書かれています。白木屋は江戸期を通じて、京都に本店がありました。初代当主は近江長浜の生まれで、慶安期の末（1651年頃）に京都で材木商を始め、寛文２年(1662)には、江戸日本橋に小間物を扱う日本橋店を出しました。この店が、『永録』の時期には、奉公人200名近くの大呉服商に成長しました。近代になってからも百貨店に引き継がれました。そして、平成11年１月31日に東急日本橋店が閉店するまで白木屋の歴史が続いたのは、ご存知のとおりです。

解読した条項の内容

52の条文には、奉公人の心構え・商売に関すること・生活全般に関すること、といった内容が順不同に織り込まれています。白木屋日本橋の奉公人は、ほぼ全員が近江を中心とした上方の出身者です。11歳頃に採用されて江戸に下り、住み込みで働いていました。そのため江戸での日々の暮らしが見えてくるような興味深い規定が残っているわけです。

・増えてしまった「残掛」（回収できていない掛売りの代金）を、とにかく減らすことが肝要。（年6回の大々的な掛取り以外にも）普段から工夫して催促するように。
・購人の多少にかかわらず、「物買衆」（お客さま）は、とても大切にするように。少量の場合でも、「人相よく」（愛想よく）懇ろのあいさつが当然。
・「表売場衆」（店でお客様に接する奉公人）は賑々しく声をかけるように。
・商品の取扱いは丁寧に。年若い奉公人には、十分に指南すべきである。
・驕り高ぶった心がないように、家訓定法を守ること。
・外出するときには、店に断って出るように。その際、公用（店の用事）か私用かをきちんと告げること。公用だと言って、私用を済ませてはいけない。
・お得意さまへの「音信物」（進物・付け届け）や饗応は、多すぎても少なすぎてもいけない。なぜなら、その係を引き継いだ後任者が、やりにくくなるから。
・お得意さまには、普段からお手紙でごあいさつするように。また、お客さまの筆跡は、見覚えてしまうように。

いずれも、現在にも通用する商売の基本や極意、といった内容ですね。

そのほかの条項

「子供」（元服前の奉公人）は、「若衆」や「手代」の言いつけに従って、昼間は店の仕事を覚え、夜は手習いの稽古・算筆などを教わり、季節ごとの挨拶状の書き方なども覚えました。

木綿類・羽二重・縮緬・麻上下・毛氈類・晒布・呉服物など、多種多様な商品はその扱い方もそれぞれ違います。店内教育でそれらの「指南」を受けている若い奉公人たちの姿が目に浮かびますね。生活の様子がうかがえるほかの条項を誌面の許す限り拾ってみましょう。

・お互いに金銭を貸借することは、少額でも禁止。
・衣類は、自分の格式より低めの物を着用するように。
・年若い衆は、悪所場に足を踏み入れてはいけない。

規定と実態

『明鑑録』という、白木屋の奉公人の不始末を記録した帳面には、「奉公人どうしの金銭の貸し借り」も「酒肴」も「新吉原通い」も、数多く出てきます。実情は、そうだったのですね。『永録』は、店側が求めている「理想の奉公人像」です。それはそれで興味深く、白木屋の経営理念や方針をうかがうことができます。

しかし、「こんな厳しい規則で、しばりつけられていたのか」ではなく、その逆の実情があったからこそ定法の必要性があった、と考えるべきでしょう。

たくさんの史料をいろいろな角度から読むことによって、実態が立体的に見えてきます。

【注】本稿はセミナー実施後、油井宏子講師に『永録』の内容を中心にまとめていただいたものです。
写真：広報部会・菅沼和男

江戸東京博物館友の会　特別観覧会
（2006/4/10）

ヴェルサイユ宮殿美術館
ナポレオンとヴェルサイユ展

あいさつするプリンセス・ナポレオン

4月8日から6月18日の間開催されたナポレオンとヴェルサイユ展の特別観覧会が4月10日午後4時から開催されました。この展示はフランスの歴史からいえばナポレオンの皇帝戴冠二百年記念となるようです。主催者は東京都歴史文化財団、江戸東京博物館、ヴェルサイユ宮殿美術館、および日本経済新聞社です。ヴェルサイユに関する展覧会は日本経済新聞社としては二度目で、前回は平成14年に開催し、その時は革命の犠牲者マリー・アントワネットが中心だったそうです。今回はナポレオンとヴェルサイユが主題です。

この展覧会にはフランス側も大変な意気込みを見せています。竹内江戸博館長のあいさつに続いて駐日フランス大使ジルダ・ル・リデック氏は日本語で謝礼を述べ、フランス語で美術史的解説を語りました。日本経済新聞社の杉田社長のあいさつの次にはゲストとしてヴェルサイユ宮殿美術館総裁、ヴェルサイユ宮殿美術館館長のあいさつ、そして、ナポレオン一族の現代の代表者プリンセス・ナポレオン（と呼ばれていました）の謝辞がありました。フランスから駆けつけたこれら三人は、すべて女性なのが印象的でした。このようにいつもよりはスピーチが多い開会式のあと展示を見学し、いつもよりは盛大な（?）レセプションの席があって、観覧会を終わりました。

フランス革命からナポレオンの台頭、活躍、失脚の歴史をたどり、その中でのヴェルサイユ宮殿と美術を考えることは大変複雑でうんざりするのですが、この展覧会ではそのようなことを考えずに、栄光のナポレオンとヴェルサイユに関係する「美」のみを鑑賞すれば十分に酔いしれることができます。

壁を飾る、輝くような数々の肖像画、戴冠式の図、マリールイーズとの結婚式の図、そしてグラン・トリアノン離宮の午餐の間、ナポレオンの執務室、さらにグラン・トリアノンの装飾類、陶磁器・工芸品等、展示総数は大小とりまぜ152点におよびます。

『図録』はナポレオンが周囲の国々に攻め入ったことについてやや弁解的ですが歴史の記述にも詳しく、神戸市立博物館学芸員岡泰正氏による、江戸時代に日本がオランダやロシアから得ていたナポレオン情報のことも載っていて、興味をそそられます。日本語分約270ページ、フランス語分約60ページ、厚さ27㎜、重さ1600g、価格2300円の大変な力作です。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤幸彦

江戸博クリップ

ひとりごと

学芸員　原　史彦

江戸博の知られざる「名所」を紹介しましょう。一つは5階展示室床カーペットの色。5階カウンター前や、豪農の蔵の前など、棒状に濃い色になっている所が室内10カ所程ありますが、これって何か分かりますか。

これは、開館時に導入が予定されていた無人走行の電気自動車の停車位置なんです。2人乗りで、モニターもついており、各コーナーの前へ行けば、そのコーナー解説が自動的に表示され、途中で乗り捨てても、ちゃんと5階カウンター前まで戻ってくるという優れものなんですよ。しかし運営・管理上の難しさから、ついに今日まで日の目を見ることなく、今では地下で埃をかぶっています。

あと、1階の喫煙所がある中庭に、エスカレーターをはさんで3基の排水孔覆いがありますが、脇面の格子状鉄板に「中央卸売市場」って書いてあることに気付いた人はいますでしょうか。

これは江戸博建設の時に出土した、旧やっちゃ場の排水溝の蓋なんです。鹿島建設が、捨てるのは何だからといって再利用してくれてたんです。ホール前の柱の陰にある四爪碇も、同じく鹿島建設が防錆加工してとっておいてくれた物で、せっかくだから「大江戸八百八町」展で初めて展示させていただきました。ただ、収蔵資料ではないため、収蔵庫へ戻すことも出来ず、今でもそのまま柱の陰に残されて（放置されて）います。

紙面の都合で、これしか紹介できませんが、まだまだ隠れた「名所」が館内にありますので、皆さんも探してみてください。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

江戸東京博物館友の会　見学会（2006/5/13）

明石町を中心に歴史ある町を歩く

＜銀座（東銀座側）と築地方面の探訪＞

▲雨の中、築地本願寺を見学

小雨の中にもかかわらず参加者は70名もあり、5班に分かれての見学会となりました。

今回は人気スポットゆえ、集合時間30分前から東京メトロ「築地駅」入口は参加者で一杯となり、早めの出発でした。築地本願寺から明石町、新橋演舞場まで広い地域を3時間ほど歩いたのですが、中心は明石町。外国人居留地としての歴史ある町ではありますが、いずれは聖路加町になるのではと思わせるほど聖路加一色でした。

その中でも戦災から逃れた古い建物、特に銅版造りの看板建築をいくつも見ることができました。また数年前にはその規模と構造の大胆さで話題を呼んだ聖路加タワーですが、展望台からの眺めは素晴らしいものでした。あちらもこちらも、遠くも近くも、全部を見たい見たいで時間が足りません。いつも隅田川や深川から眺めた高層ビルが、今日はここから町を見下ろす天守閣です。地上をいくら歩いても上からの眺めとは異なっていて、それだけでも江戸を二度楽しめたようでうれしいものでした。

築地居留地跡の案内板

次は少し南に下って、中央区立郷土天文館を訪ねました。昨年末に開館したばかりといいますが、その中の郷土資料館には感心しました。特に築地ホテル館については浮世絵でしか知らなかったのですが、模型があって、魚河岸の模型や白魚漁の四つ手網の資料などとともに、大いに参考になりました。さらには『旧聞日本橋』で知られる長谷川時雨のコーナーがあり、積読（つんどく）の岩波文庫を思い出しました。

そして楽しい半日の江戸探訪は終わりました。複数の班に分けることで説明が聞きやすかった点は評価されていたようですが、レジュメに挟まれた地図に歩くルートを明確に示してもらうとよかったという声もありました。

それから最後のオプションの懇親会は場所確保も大変だと思われますが、会員同士の熱き意見交換の機会として好評で、皆さんぜひまたお願いしたいとおっしゃっていました。

【報告】　文：事業部会・下永博道
　　写真：広報部会・松原良

会議・会合日誌

2006/4～2006/5

◆江戸博・友の会連絡協議会

4月27日(木) 16時30分から開催。江戸博から竹内館長、木村副館長、小澤教授、小林事業企画課長、滝島管理課長、友の会からは岩松会長ほか9名が出席した。

友の会から17年度の事業・決算報告、18年度の事業計画・予算の概要について説明し、若干の質疑応答を行った。

◆役員会

4月13日(木) 18時から開催。会計の収入・支出項目の改定について了承した。サークル活動の支援のあり方について検討部会でタタキ台を作成することにした。出席12名。

4月19日(水) 14時から臨時開催。総会資料について最終的な打ち合わせを行った。出席者11名。

5月11日(木) 18時から開催。定期総会の段取りほかについて協議した。出席12名。

◆事業部会

4月6日(木) 18時から開催。3月に実施した各催事の状況報告、および6月までに予定されている催事の担当を決定した。出席者15名。

4月28日(金) 18時から開催。当面の5月、6月の行事予定と担当者について確認した。出席10名。

◆広報部会

4月19日(水) 16時から開催。『えど友』の投稿欄「えど友プラザ」への原稿募集のチラシ原稿、新企画の具体化について検討した。出席7名。

5月17日(水) 16時から開催。『えど友』第32号の原稿の提出状況などについて検討した。出席7名。

◆総務部会

4月26日(水) 13時から開催。『えど友』第31号ほかの発送を行った。出席者12名。

5月1日（月）13時から開催。第6回定期総会開催通知等の発送、および新年度の総務部会の方針、総会運営の役割分担について協議した。出席者10名。

5月16日(火) 13時から開催。総会の当日運営の準備などを行った。出席者10名。

5月24日(水) 13時から開催。司会予定者を含めて総会の最終打ち合わせを行った。出席者10名。

えど友プラス

～友の会会員の投稿欄～

特集
＜私の昭和・東京＞ その1

戦争、空襲そして終戦

原　謹子

“見よ東海の空明けて、旭日高く輝けば…”1年生になって間もない私たちは先生について歌いました。歌の意味もわからずに。私の記憶の中、戦争とはもちろん日中戦争です。近所の人が応召され、旗を振り、見送りに行く。千人針の奉仕をしたり、戦地の兵隊さんに、慰問のお人形づくりなどし、日々戦局は激しく、物資も乏しくなり、母に連れられて、菓子やタバコなど行列に並んで買だめをしました。小学5年の12月8日太平洋戦争の宣戦布告のニュースに身の引き締まったことを鮮やかに覚えています。6年生の修学旅行(関西方面)は廃止になり、成田山に変更になりました。真珠湾勝利、シンガポール陥落などのちょうちん行列にかり出されたことなども思い出です。

東京大空襲の夜は、はじめは壕(ごう)の中で、恐ろしいと感じていましたが、そのうちに誰かが東京は火の海だと告げていました。府中橋の上で眺めていると、低空を飛ぶB29の機影が探照灯ではっきり照らし出されて見えました。翌日市川駅の方へ行きますと、前夜焼け出された人々が哀れな姿で子供を連れて歩いているのに会いました。父は砂町の軍需工場に行っていましたので、空襲で焼けた人がごろごろしている話を聴かせてくれました。私は空襲を境に、空を仰いでは、今日一日無事に生きていられるだろうかと、終戦の日まで毎朝思ったものでした。

学校卒業とともに、日本パイプ工場に徴用になり、空襲警報とともに壕に入ったり、出たりの繰り返しでしたが、8月15日は朝から、昼に重大放送がある旨放送され、大人の人たちは本土決戦のことかなと話していました。

正午に陛下の放送があり、広場に集まって詔勅(しょうちょく)を拝聴しました。私が心に残ったのは「堪え難きを堪え忍び難きを忍び」というお言葉でした。

庭に真っ赤なカンナの花が、夏の日ざしの中に咲いているのが目に入りました。大人の方々は泣いておられましたが、私は「これで生き延びられて良かった」という思いで頭がいっぱいでした。14歳の私の偽りない気持ちでした。当時、私は市川の須和田に住んでいました。

震災復興途中の昭和初期

福島秀男

私が小学校に入ったのは昭和2年(1927)4月です。東京市立二葉尋常小学校は大正12年(1923)9月の関東大震災に遭って焼失してから、まだ4年しか経っていないので、亀沢町2丁目に平屋建てのバラック校舎でした。

懐かしいこの校舎の思い出は、ただ入学式の時に先生とクラス全員で撮った写真1枚があるくらいです。と申しますのは「新しい鉄筋コンクリート3階建ての立派な校舎」が9月の新学期から使えるようになったからです(学校は石原町1丁目に移転します)。校舎も机も新しい、それに本所地区(今の墨田区)唯一プールのある、モダンな学校なのです。今思い出しても勉強は二の次、友達と遊んでいた満州事変ぼっぱつ前の平和な時代でした。

当時、二葉小学校は対外運動として、水泳はもちろんですが（東京市小学校対抗で優勝、当然ですね！プールのある学校ですもの)、デッドボール（今のドッヂボール）も区内で1、2を争う強いチームでした。対外運動ではありませんが、草野球も盛んでしたね。それにローラースケートもはやっていました。昭和初期は（震災の）復興途中でしたので、町のあちこちに原っぱがあり、一部コンクリートの道路もありました。そういえば国語の教科書で「我ら国民8千万は天皇陛下を親とも思い…」という文章が載っていましたが、現在では1億2千万と、人口も5割も増えたわけです。

学校での朝礼で校長先生（安藤・久保内先生）のお話が終わると、必ずラジオ体操を全員で実施しました。「ラジオ体操」は昭和3年(1928)11月3日にJOAK(NHK)の電波にのって初めて全国に放送されました。ちょうど私の小学2年の時で、今日まで80年も続いているわけです。私も当時の体操が基礎になり、現在毎日6時半には近くの横網町公園で、約70名の方々と年間を通じてやっております。この会場での年中無休の体操も39年目になりました。今85歳になりましたが、お蔭様で元気に過ごしております。

生まれ育てられて、晩年を迎えておりますが、昭和の時代はあまりにも多くの事件があり、中国に4年兵隊として勤めたことも含めて、次から次へと思い出は尽きることはありません。

水　泳

鳥居豊彦

「川で泳ぐのは危ないから駄目」と親や先生からいつも注意されていたが、夏になると大川（子供の頃、隅田川をこう呼んでいた）でしょっちゅう泳いでいた。大川は学校のプールにはない、なにかよく分からない魅力が潜むようで、こどもたちの冒険心をあおった。大川と付近の小河川は事故防止のため水上署員がモーターボートで巡回していた。私たち悪童は見張りをたてることにし、当番はガキ大将が指名するかジャンケンで決めた。「オーイ水上が来たぞー」の合図で仲間は急ぎ陸に上がり、クモの子を散らすように隠れた。旧深川区は大川に通じる小河川や掘割がたくさんあって、こどもが落ちる危険が多く、弟もかくれんぼ中、大横川に落ちたこともあった。

私の通っていた臨海尋常小学校（平

成17年に百周年を迎えた)では水泳に力を入れ、全校児童皆泳を目指していた。スポーツセンターなどない時代、幸いにも母校にはタイル張りの立派なプールがあり、夏休み中は体育担当の先生方が毎日熱心に指導してくれた。他校の生徒も水泳教室に大勢通ってきた。

プールでは金づち組は目立つ赤い帽子、泳げる児童はその距離により、白い帽子に黒の細い布を一本また一本と縫い付けた。先生方は黒い帽子をかぶっていたと記憶する。

自校にプールがある有利さで、区の水泳大会で上位を独占するのは当然で、入賞者は明治神宮プールでの東京大会に出場した。

泳いで寒くなったら校庭のアスファルトに腹ばいになり、冷えた身体を暖めたのも懐かしい。

昭和12年頃のことで、この年の5月に双葉山が横綱に昇進し、7月7日には盧溝橋事件が起きて、日中戦争へと進んでいった。

思い出がいっぱいのプールも、昭和51年、新校舎の完成と同時に校庭から屋上へと移ってしまった。

※「私の昭和・東京」へのご応募ありがとうございます。誌面の都合で今回掲載できなかった方は次号以降順次掲載してまいります。引き続き投稿をお待ちしています。

えど友

サークルだより

会員の自主的サークル・「えど友サークル」の最近の活動状況をご紹介します。

活動概況

◆**江戸・東京を巡る会：**6月から活動予定

◆**落語・講談を楽しむ会：**4月7日(金)向島周辺散策8名。5月27日(土)落語ビデオ鑑賞3名。

◆**藩史研究会：**4月27日(木)対馬藩史研究発表16名、5月25日(木)対馬藩宗家墓域（養玉院・如来寺）参拝14名。

◆**古文書で『八丈実記』を読む会：**4月13日(木)9名、4月28日(金)10名、5月11日(木)9名、5月26日(金)10名。

スポット紹介　「藩史研究会」

会員数29名、4月27日の会は第9回で、世話役の大渡氏が対馬藩について発表しました。出席者16名、そのうち女性2名でした。今までに宇和島（伊達）、播磨三日月（森）などの小藩の報告もありましたが、なかには女性で加賀（前田）百万石に取組む人もいて、この研究会はすごい学者の集まりなのではないか、と恐る恐る潜り込んだ次第です。

対馬藩は辺境の離島とはいえ、江戸時代には対朝鮮外交の最先端として、朝鮮に対しても徳川幕府に対しても落ち度のない仕事をしなければならず、さらには朝鮮使節の接待に漢詩の詠み競べをするタレントも召し抱えていなければならない、など話題も多い藩です。

大渡氏は藩主宗家の歴代の話題、朝鮮と幕府の間を丸く納めるために「国書偽作」をして、それが発覚した事件、幕末明治維新の対馬、木下順庵門下の逸材雨森芳州のこ

となどを100分弱にまとめて発表しました。なるほど藩政史を中心にいろいろな文献を調べ、それらをまとめて120分の「○○藩通史の一席」を作るのが講師の役割とすれば、誰でも講師になれそうです。

興いたれば、でしょうか、今までに2回、藩主の江戸の墓地見学もしています。この日、対馬の宗氏の遺跡を見に行こうじゃないか、という声も聞こえました。

研究会の続きは、恒例？両国の町に繰り出します。この日参加者7名（臨時参加の不肖私も加わっています）大いに盛り上がりました。

江戸時代大好きの諸兄諸姉、この会に参加し、時々一席うかがってはどうでしょうか。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤幸彦

●新しいサークルの立ち上げを！

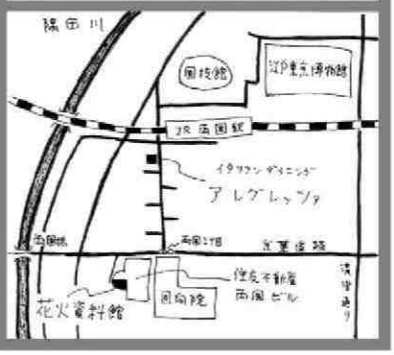
現在4つのサークルが独自の活動を展開しています。みなさんもサークルを立ち上げて、同じ趣味や関心を持つ人々との交流を深めてみませんか。サークルをスタートさせるための資料（ガイドライン）の請求、お問い合わせは事務局へ。

申込先　〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局
Tel.03-3626-9910

ちょっと寄ってみませんか？

江戸博界隈 ⑩

[花火資料館]と [イタリア料理・アレグレッツア]



両国花火資料館と隅田川花火大会

夏の夜空を彩る花火といえば「両国川開き」の花火を思い浮かべる人は多いはずです。その両国に花火資料館ができたのは平成3年。小さな資料館です。しかし小さいながら、錦絵やポスター、花火の模型、ビデオ「花火のできるまで」などを有効に使い、花火の歴史と構造がよくわかるよう工夫されていました。外国人の旅行者もけっこう多く訪れるとのことです。

日本で最初に花火を観賞したのは将軍家康で、慶長17年(1612)明の商人が献上した花火だといわれています。花火の原料になる火薬は戦略物資で、初期の頃は市中に出回ることはあまりなかったようですが、将軍家光の頃から急速に流行しはじめます。慶安元年(1648)には、隅田川以外でねずみ花火や流星、その他の花火をしてはならないという幕府のお触れも出ており、玩具花火のようなものが庶民の間でもすでに普及していたと思われます。

「両国川開き」の花火が始まったのは享保18年(1733)です。その前年は大飢饉に加え、江戸市中にコレラがはやり多数の死者が出ました。将軍吉宗はこれを悼み、慰霊と悪病退散を祈願して陰暦5月28日、川開きの日に隅田川で水神祭を行いました。このとき、両国の茶屋と船宿もお金を出し合って川施餓鬼に大花火を上げ、以来、川開きの日には花火が打ち上げられるようになったということです。

「両国川開き」の花火は江戸っ子の人気をさらい、川は夕涼み舟で、岸は人で埋まりました。しかし幕末の動乱期には花火どころではなかったようで、文久3年(1863)には中断され、再開されたのは明治元年(1868)でした。

その後も「両国川開き」の花火への熱気が衰えることはありませんでしたが、昭和に入って日中戦争開始の12年(1937)には再び中断されます。太平洋戦争に突入すると、花火工場は休業や軍需工場の下請けとなりました。戦争が終わっても、GHQ(連合軍総司令部)による銃砲・刀剣類の規制が火薬にも及び、許されませんでした。両国に伝統の花火が復活したのは昭和23年(1948)でした。だが、わずか13年で、またまた「両国川開き」の花火は中止になります。住宅の密集、交通渋滞、川の汚染などによるものです。隅田川は悪臭がひどく、花火師も近寄れないほどだったといいます。

昭和36年(1961)を最後に両国の花火に空白の時が流れます。市民生活を無視した産業優先への批判が次第に高まり、やがて環境が見直され隅田川にもハゼが戻ります。昭和53年(1978)、待ちに待った花火が打ち上げられました。名称が「両国川開き」から「隅田川花火大会」に変わったのは、この時です。住宅の密集や保安距離の関係上、会場が両国橋畔でなく、第1会場が言問橋と白髭橋の間、第2会場が厩橋と駒形橋の間になったためです。今年は7月29日(土)に行われます。

江戸博から徒歩8分。墨田区両国2-10-8 住友不動産両国ビル1階　開館　木・金・土曜日（ただし7月と8月は毎日）12時～16時。問い合わせ　墨田区文化観光協会：電話03-5608-6951。

参考図書：『花火千夜一夜』JICC出版局

イタリア料理・アレグレッツア

開業して8年。アレグレッツアとはイタリア語で「愉快」という意味だそうです。全部で34席のこぢんまりした店は、手作りにこだわり、家庭的な雰囲気を大切にしています。パスタ(乾めんを除く)もフォカッチャ(パン)もケーキもみんな自家製です。

スパゲッティが自慢ですが、薄生地のピザもなかなかの味です。ほどよい酸味のトマトソースの料理が好評とのことで、魚料理ではその日に入荷した新鮮なスズキ、ハマチやサケなどを使います。

サービスランチは3種類あってすべてサラダにドリンク（コーヒー、紅茶、ジュースなど）つきです。Aランチは日替わりスパゲッティで840円、Bランチはピッツアまたはリゾットまたはフェットゥチーネで1050円。Cランチは1470円で、その日の魚料理、肉料理から1品、スープにパンが付きます。スパゲッティは量がやや少ないと感じる人もいるかもしれません。110円足すと大盛りになります。また220円足すと、ケーキがセットになります。グラスビール、グラスワインもランチでは1杯220円でサービス。

パーティメニューは2000円、2800円、3800円。2000円プランで、前菜の盛り合わせ、カルパッチョ、シェフのおすすめ前菜、ピッツア、パスタ料理2種、サラダ、パンです。

江戸博から徒歩4分。墨田区両国2-13-8 電話03-5624-6535　年中無休、営業時間　11時半～23時。ランチタイム　11時半～15時。

【取材】 文：広報部会・大野晴美
イラスト・写真：同・松原良

催事案内

友の会セミナー

第41回「鹿鳴館の女たち」
講師　近藤富枝さん

◆平安時代の文壇史と明治・大正時代に生きた女性を題材にした作品の多い作家の近藤富枝さんに、今回は不平等条約改正のため奮闘した政治家および軍人の夫人たちに焦点を当て、鹿鳴館を舞台にその活躍ぶりをエピソードをまじえて、お話いただく予定です。

○講師略歴：こんどう・とみえ

文筆家。大正11年(1922)東京日本橋矢ノ倉町(現東日本橋1丁目)の袋物問屋に生まれる。東京女子大学卒業後、文部省を経て、昭和19年(1944)日本放送協会(NHK)入局。アナウンサーとして活躍、その後作家活動に入る。著書多数。

※当日は近藤先生の著書の販売も行う予定です。

・開催日：7月22日(土) 14：00～15：30
・申込締切：7月11日(火)必着
・会場：江戸東京博物館・1階会議室
・定員：100名　同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】伴野睦雄(事業部会)

第42回「落語の起源と寄席のはじまり」
講師　山本　進さん

◆昨今、落語ブームが続いています。テレビの「笑点」も長寿の人気番組です。落語の世界がドラマにも登場するくらいです。寄席も若者たちで盛況とか。でも年配の方々には、五代目志ん生、八代目文楽、八代目正蔵、六代目圓生、五代目小さんなど昭和の名人といわれた人たちの話芸は強烈で忘れられないでしょう。そんな落語がいつ、どこで生まれたのか、それが現代の落語にどう受け継がれてきたのか、知りたいと思いませんか？今回、落語の起源、変遷、そして寄席のはじまり等落語にかかわる歴史についてお話していただきます。

○講師略歴：やまもと・すすむ

芸能史研究家。諸芸懇話会会員。昭和6年(1931)、兵庫県生まれ。横浜に育つ。東京大学法学部卒。在学中落語研究会に所属。著書に『えぴたふ六代目圓生』(平凡社)『落語ハンドブック』(三省堂)『落語ハンドブック改訂版』(三省堂)、共著に『圓生全集』『寄席育ち』『増補・落語事典』(以上青蛙房)『落語家事典』(平凡社)『日本芸能人名事典』(三省堂)他多数。

・開催日：8月5日(土) 14：00～15：30
・申込締切：7月25日(火)必着
・会場：江戸東京博物館・1階会議室
・定員：100名　同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

特別内覧会

特別展　驚異の地下帝国 始皇帝と彩色兵馬俑展 ～司馬遷「史記」の世界～

◆司馬遷の『史記』が語る中国春秋・戦国時代から前漢・武帝までの約700年間に焦点を当て、各時代を代表する彫塑・装飾品・武具・生活用品など、中国の最新調査で発見された文物資料が厳選・展示されます。特に地下帝国ともいうべき秦の始皇帝陵の兵馬俑の中でも、鮮やかな彩色兵馬俑は中国以外では初公開です。

・開催日：7月31日(月)時間未定
　＊開始時間は申込んだ方には受講票でお知らせします。
・申込締切：7月20日(木)必着
・会場：江戸東京博物館・1階ホール／1階企画展示室
・定員：100名　同伴者可(はがきに氏名連記)
・参加費：会員500円、同伴者700円

【企画担当責任者】伴野睦雄(事業部会)

今後の予定(詳細は逐次ご案内、変更する場合もあります)

●「映像史の視点・映画に見る東京」
講師　深川英雄さん(駒沢女子大学教授)
・開催予定日：9月23日(土・祝)

●「江戸の最高学府－昌平黌とそこに学んだ人々－」
講師　村山吉廣さん(早稲田大学名誉教授)
・開催予定日：10月28日(土)

●「江戸の狂歌ブームを探訪する」
講師　川口順啓さん(金沢学院大学客員教授)
・開催予定日：11月25日(土)

●「江戸の町割長屋の人々の暮し向き」
講師　小林信也さん(川村学園大学講師)
・開催予定日：12月23日(土・祝)

古文書講座

3講座・第1期の残日程(申込み終了)

◆入門編　第1期

・開催日時：第2回　7月5日(水) 14:00～16:00
　　第3回　9月6日(水) 14:00～16:00
・会場：いずれも江戸東京博物館・1階会議室
・講師：小松賢司さん(学習院大学大学院史学専攻)

◆初級編(1)第1期

・開催日時：第2回　7月19日(水) 14:00～16:00
　　第3回　9月20日(水) 14:00～16:00
・会場：いずれも江戸東京博物館・1階会議室
・講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)

◆初級編(2)第1期

・開催日時：第2回　7月15日(土) 14:00～16:00
　　第3回　9月16日(土) 14:00～16:00
・会場：いずれも江戸東京博物館・1階会議室、第3回は当初、事務棟2階会議室でしたが、いつもの1階会議室に変わりました。
・講師：小宮山敏和さん(徳川林政史研究所)

【企画担当責任者】上田太一(事業部会)

お申込方法

◆普通はがきに、①催事名・開催日、②会員番号、③氏名（同伴者連記）を明記して下記の「友の会事務局」へ。
なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。
◆締切：各催事の案内をご覧ください。
◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1
　　江戸東京博物館友の会事務局

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更のご連絡などはなるべく水曜日か金曜日にお願いいたします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会員優待のお知らせ

●特別展 驚異の地下帝国 始皇帝と彩色兵馬俑展 ～司馬遷「史記」の世界～

会　期　2006年8月1日(火) ～10月9日(月・祝)
休館日：毎週月曜日、ただし9月11日、9月18日の各月曜日は開館
図　録　定価、会員割引とも未定
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

次回予告

●特別展　ボストン美術館所蔵 肉筆浮世絵展　江戸の誘惑

会　期　2006年10月21日(土) ～12月10日(日)
休館日：毎週月曜日
観覧料、図録定価（会員割引も）未定

企画展ご案内

好評開催中！お見逃しなく！

・発掘された日本列島2006 新発見考古速報展

開催期間　2006年6月20日(火) ～7月23日(日)
会　　場　5階常設展示室内　第2企画展示室

次回予告

・美空ひばりと昭和のあゆみ展

開催期間　2006年7月29日(土) ～10月1日(日)
会　　場　5階常設展示室内　第2企画展示室

活動に参加しよう　各部会員を募集！

事業部会＝友の会セミナーや見学会、古文書講座など、事業の企画から運営までを担当。
広報部会＝会報『えど友』の編集・制作、ホームページ『えど友Web版』の制作・運営などを担当。
総務部会＝友の会の運営全般、総会の運営、会報の発送、催事の受付などを担当。
普通はがきに希望部会、会員番号、氏名を明記して「友の会事務局」へご応募ください。

江戸東京博物館友の会　会報<えど友>第32号
平成18年7月1日発行
奇数月刊。次号は平成18年9月1日発行予定

編集・制作：友の会広報部会
〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1　電話03-3626-9910
発行人兼編集長：松原　良(副会長)　　副編集長：菅沼和男
編集人：岡橋園子、佐藤幸彦、大野晴美、斎藤美香子、稲垣武志、岡田守弘、高澤美恵子、岡本静雄